

島根県立大学交流県留学生への日本語教育の 必要性と今後の課題

—「島根県立大学交流県留学生松江日本語研修」報告—

松 田 みゆき

はじめに

1. 松江研修実施の背景
 2. 松江研修のコースデザイン
 3. 松江研修の実際
 4. 松江研修の評価
- おわりに —今後の課題—

はじめに

島根県立大学(以下、県立大学)は、平成13年1月10日から3月27日までの約2か月半、松江市のしまね国際研修館¹⁾において、平成13年度学部入学予定の「交流県留学生」に対して「島根県立大学交流県留学生松江日本語研修(以下、松江研修)」²⁾を行った。この日本語研修は、「県立大学総合政策学部学生としての学業、地域交流及び大学生活に必要な日本語能力を養成するため」³⁾に県立大学が財団法人しまね国際センター⁴⁾に委託して実施された。筆者は本研修のコースディレクターとしてニーズ分析とレディネス分析を行って教授計画を決定し、研修の教務全般に携わった。

この研修によって、交流県留学生の入学前日本語教育に顕著な成果があがった。本稿では、その研修の教授計画決定の経緯や実際に行われた研修の記録をできるだけ詳しく記し、松江研修を実施した結果、明らかになった入学前日本語教育の必要性を述べた。更に、県立大学における今後の留学生受け入れ、留学生の入学前・後の日本語教育の課題を明らかにし、交流県留学生の留学生生活をより有意義なものとする目的で幾つかの提言を行った。

1. 松江研修実施の背景

県立大学は、北東アジア地域を教育・研究のフィールドとして広く開かれた大学を目指し教育研究活動を行う一環として、「交流県留学生制度」を導入している。「交流県留学生制度」の目的は、「北東アジア地域の将来を担い、島根県と交流県との相互理解及び友好関係の増進に寄与する人材の育成に貢献することにある」⁵⁾とうたわれている。

「交流県留学生(以下、留学生)」は、島根県が友好交流協定を締結している地域の出身者を学部学生として受け入れる「交流県留学生制度」による留学生である。県立大学開

学と同時に始まったこの制度によって、平成12年度、13年度ともに、中華人民共和国吉林省、大韓民国慶尚北道から各2名の留学生を受け入れた。その結果、平成13年11月末現在、県立大学には計8名の留学生が在籍している。平成14年度は中華人民共和国寧夏回族自治区からの留学生の受け入れも新たに決定している。

日本の大学における留学生活では、生活一般に必要な日本語とコミュニケーション能力、いわゆる「一般日本語」の他に専門分野の学術研究活動に必要な日本語とスキル、いわゆる「専門日本語」が必要とされる。しかし実際には、十分な一般日本語能力すら持たずに来日する留学生は極めて多く、上級レベルの一般日本語能力を持つ留学生でさえ、日本の文化・社会への知識や適応能力の不足、専門分野に関する知識・学習スキルの不足のために、大学における勉学に速やかに対応できないことが多い⁶⁾。

県立大学においても、留学生受け入れ資格の一つに、「留学生は修学に差し支えない程度に日本語を解する者であること」⁷⁾という条件を求めたが、県立大学開学初年度(平成12年4月)に入学した留学生の日本語能力は残念ながら不十分であった。このため、留学生の生活面・学習面の双方で困難点が多く報告された。これを受けて、平成13年度の県立大学入学予定留学生4名に対して約2か月半の入学前日本語研修が実施されることとなった。

2. 松江研修のコースデザイン

松江研修のコースデザイン決定の経緯について以下に述べる。

本稿における「コースデザイン」とは、松江研修に係る諸条件の情報を収集分析し、教授計画を決定するまでの一連の作業過程を呼ぶ。

留学生に求められる日本語能力とは何かを調査し分析する「ニーズ分析」と、留学生が松江研修に臨むまでに学習した日本語能力、学習スタイル、学習適性などを分析する「レディネス分析」、そして、実際の研修に使用される学習環境など多面にわたる総合的な判断によって、初めて研修の最終到達目標が設定される。更にその到達目標に到達すべく、具体的な教授計画が決定される。

以下に、ニーズ分析とレディネス分析に分けて記した後、最終到達目標と教授計画を記す。

(1) コースデザインのためのニーズ分析

最初に、「大学での勉学に対応できる日本語力(アカデミック・ジャパニーズ)」⁸⁾について、文部科学省の調査研究協力者会議が提示した概念図を分析し、広く一般の日本の大学が留学生に求めるニーズについて考えた。

次に、今回の松江研修対象者の1年先輩にあたる平成12年度留学生が、入学後に直面した日本語能力不足による困難点を具体的に明らかにすることによって、松江研修のニーズを探った。

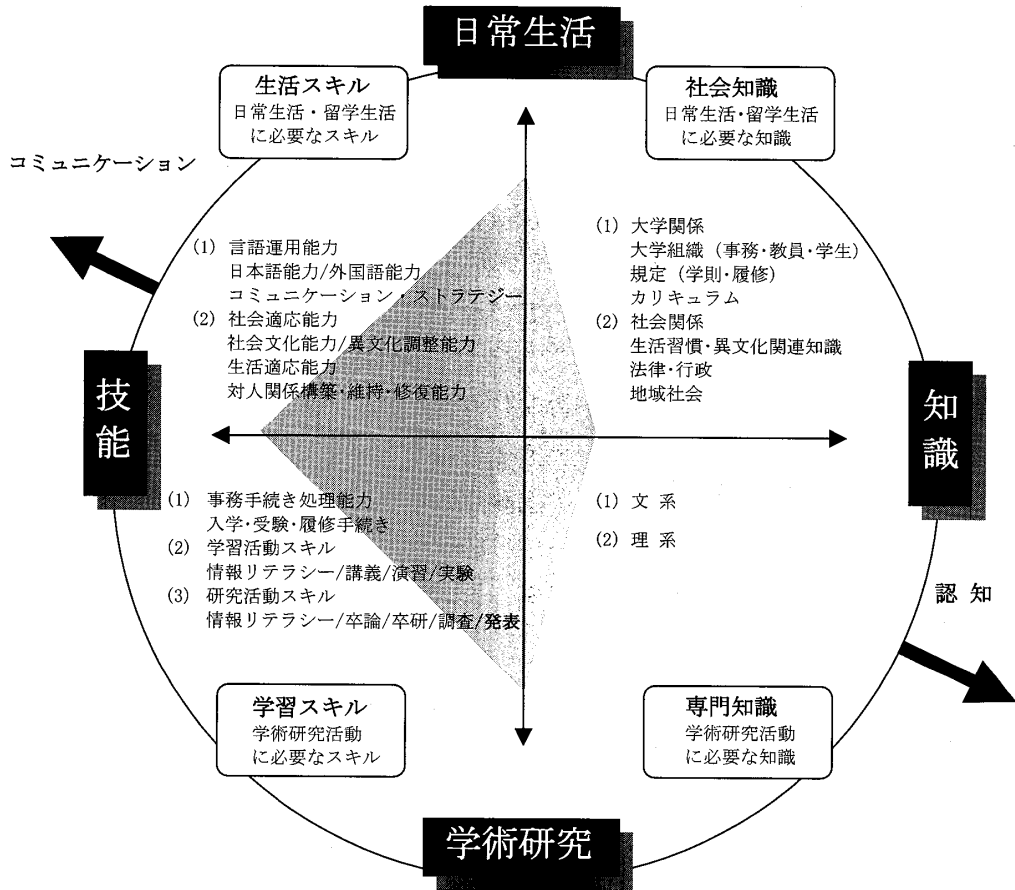
更に、その留学生への日本語補講⁹⁾及び専門教育を担当した県立大学の教官が指導上問題と感じた点を明らかにし、そこから県立大学における教官のニーズ、すなわち留学生に求められる日本語能力を分析した。

1)必要とされるアカデミック・ジャパニーズとは何か

次の図は、平成14年から本格実施される「日本留学試験」の日本語シラバスにおいて、測定対象能力として提示された概念図である。

図1 「日本語シラバス」アカデミック・ジャパニーズ概念図

『日本留学のための新たな試験について－渡日前入学許可の実現に向けて－』12頁より抜粋



「日本留学試験」は、「外国人留学生として日本の高等教育機関、特に大学学部留学を希望する者が、日本の大学での勉学に対応できる力（アカデミック・ジャパニーズ）をどの程度習得しているかをシングルスケールで測定することを目的」¹⁰⁾とした試験である。この試験で測ろうとする能力、すなわち、大学入学前に備えておくべきであると示したアカデミック・ジャパニーズの範囲は、図の網かけ部分に相当する。この網かけ部分は以下のようにして定義される。

図の縦軸には、留学生が日本語を使用する場として、「日常生活」と大学における「学術研究」を両極に配し、横軸には「技能」と「知識」を両極に配している。これら四つの指標を直線で結んだ範囲が、大学入学前に必要とされるアカデミック・ジャパニーズを表わす。

この図は、知識よりもまず技能としての日本語能力を求めることを明示している。大学入学後は、この図の左から右方向の網かけ部分の外方向に向けた活動へ、つまり技能から知識方向への勉学活動が増える。この時、日本語の言語運用能力は、知識獲得のためのスキルとしての位置付けとなり、より専門分野の教育へと重点が移っていく。つまり、留学

生に対する日本語教育には、「日本語」自体を目標とするのではなく、勉学活動をするための有用な「道具としての日本語」を学んだ上で、更に「専門日本語」を獲得することが求められているのである。

2) 県立大学における留学生の困難点からみるニーズとは何か

平成12年度学生は、来日直後のことを振り返って以下のように書いている。

「来たばかりのころは日本の友だちとコミュニケーションができないし、授業の内容もほとんど聞き取れなかったのが苦しみの日々だった¹¹⁾、「来日前に日本語を勉強してきたとはいえ、実際に大学の講義に出席した時は、内容を理解することができませんでした¹²⁾。

これらの文に現われている困難点を具体的に把握するため、筆者は平成12年9月21日に聴き取り調査を実施した。調査方法は座談会形式とし、日本語の補講時間に行った¹³⁾。この時点で平成12年度留学生は来日後約半年が経過していた。調査した留学生は全員が県立大学での日常生活、大学での勉学、ともに満足していることが分かった。その時点では、友人とのコミュニケーションで困ることはなく、日本文化との接触に係る困難点はほとんど意識にのぼっていなかった。自国の文化も含め、文化理解に関しては、新鮮な驚きと興味を持ちつつもストレスを訴えるということはないようであった。しかし、入学直後のことに話が及ぶと、生活上及び学習上の困難点が次々と明らかになった。そこから明らかになったニーズは、次の四つのキーワード「聴解」、「漢字学習」、「専門日本語」、「日本語能力試験1級」として代表される項目であった。以下、各々について述べる。

(a) 聴解

県立大学の留学生は、4年間の留学期間を通して国際交流会館と呼ばれる学生寮で日本人学生と共に共同生活を営む。寮では、「ブロック」と呼ばれる数名のグループ毎に分かれて生活をする。各「ブロック」には、それぞれの個室の他に玄関、洗濯機、台所、大テーブルなどの共有スペースがある。ここでの共通言語は日本語である。つまり、日常生活を送るうえでどうしても日本語でコミュニケーションをとらなければならない環境ができています。母国では日本語を日本語教室内でのみ「外国語」として学習してきた留学生が、日本語を教室の内外を問わず日常的に使用する環境にいきなり入ることとなる。留学生にとって日本語が「第二言語¹⁴⁾」となるのである。

その国際交流会館での生活開始時に日本語の聴き取りができないことから、初年度の留学生たちはコミュニケーションに苦勞した。大学での日常生活もその延長であり、当然のことながら不便を感じた。更に専門の講義では、何にも分からないという状態だったという。

これは、母国の日本語学習環境では、文字による「読む」、「書く」練習に比べ、音声による「聞く」、「話す」訓練が少なかったためと推測される。日本語の聴解能力を訓練するだけでなく、分からない言葉を聞き返したり、情報だけを聞き取る練習も必要だと考えられた。

(b) 漢字学習

韓国人留学生にとって、一般に漢字学習は負担である。漢字学習には、読み方が多様であること、字画が複雑であることなどの学習困難点があり、学習目標に到達するまでの道のりの長さ¹⁵⁾が学習者への心理的圧迫になることが多い。

漢字学習では、通常、比較的簡単で日常の使用頻度の高いものから順番に学習する。一つの漢字を学習する毎にその漢字を使用した熟語も覚えるようにする。このように語彙学習と漢字学習を同時に進めるのが一般的である。しかし、県立大学に入学して毎日講義を受けている留学生にとっては、漢字学習を漢字の難易度順に行う時間的余裕は、余りないのが現状である。日々の講義の中で繰り返し使用される語彙に使われている漢字から順に学習する方法が、最も実情に即しているであろうと判断した。

したがって、松江研修でも、専門日本語における使用頻度の高い語彙を重点的に学習することが効果的と考えられた。

(c) 専門日本語

専門分野の教育で現われる「専門用語」が難しいと聴き取り調査で留学生は報告した。専門用語には、カタカナ表記の外来語も多いので、中国人留学生は漢字でほとんど苦勞をしない代わりに外来語が分かりにくいという感想を持っていた。韓国人留学生も苦手意識をもっていた。

専門用語を難しくしているその他の要因の一つに、一般の日本語の単語でありながら、専門分野にいったん入ると意味が変化してしまう語の存在がある。これが留学生にとっては厄介である。例えば、普段、野菜や果物を買っている「市場（いちば）」と経済学における「市場（しじょう）」では、表記は同じであるのに読み方も意味範囲も異なる。また、「経済」は日常的に幅広い意味で用いられる。「日本の経済の先行きについて懸念される」、「父がリストラにあって家の経済が傾いた」、「安い夜間電力を使って昼間の暖房をすれば、なんて経済的な家なんだろう」など。

実際に松江研修では、ある留学生が「売店」という言葉から「小売店（こうりてん）」の意味を類推しようとして苦勞する場面があった。「売店」は「ばいてん」と読み、「駅の売店で牛乳を買う」などと言う。これに「小さい」が付いて「小売店」である。留学生は駅の売店は小さいから「小売店（しょうばいてん）」とも言うのかと推測したようである。確かに駅の売店も「小売店」の一種なので、筆者は読み間違いだと判断して読み方の指導だけをして見過ごしてしまう可能性があった。しかし、語義の確認のために「駅の売店以外にどんな小売店がありますか。例えば、スーパー…」と質問し、筆者が回答をうながしたところで、「小売店」が経済の専門用語であるということが初めて留学生に意識されたのである。

このような一般日本語と専門日本語における語彙の分類研究も進んできている¹⁶⁾。また、専門用語の学習には、その語の辞書的な意味の学習のみでは足りず、その語の歴史的背景及び現状での使用方法を学んで、初めて意味の理解につながるという報告がされている¹⁷⁾。

日本語教育の立場から、専門日本語における語彙学習をサポートする必要があると考えられた。

(d) 日本語能力試験 1 級

留学期間中に、日本語能力 1 級試験を受験して合格したいという希望を全員が持っていた。

日本語能力試験とは、財団法人日本国際教育協会が実施している日本語を母語としない人を対象にしたテストである。1 級の認定基準は、「高度の文法・漢字（2,000 字程度）・語彙（10,000 語程度）を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における

学習・研究の基礎としても役立つような、総合的な日本語能力（日本語を900時間程度学習したレベル）¹⁸⁾となっている。

日本語能力試験1級認定レベルというのは、日本語上級レベルの認定であり、多様な日本語学習者がレベル認定のためにこの試験を受験している。また、現在は、外国人留学生の大学入学可否の判断材料として利用されている。その利用率は国立大学では約91%、公立大学では約65%、私立大学では60%と極めて高い¹⁹⁾。

留学生にとっては、自分の実力を知るための目標として日本語能力試験は意味のある試験である。中国と韓国では、日本語能力を測る基準として最も有名なテストであり、日本語を使用した職業につく際には1級に合格していると有利である。平成14年から、留学希望者にはこの日本語能力試験に代えて日本留学試験が本格実施されるという動きはあるものの、日本語能力試験は日本語能力測定のためのテストとして存続する²⁰⁾。その背景にもこうした理由があると思われる。

日本に留学する留学生にとっては、専門分野の勉学の他に日本語能力の向上は大切な目標である。日本語はあくまでも留学生活に必要な手段であるが、同時にその能力を測定して証明したいという欲求も当然のことである。大学入学後の継続的な日本語学習を促すための動機づくりという意味でも、日本語能力試験は大いに有効であり、留学生の目標としてふさわしいということが明らかになった。

3) 日本語教育担当教官の立場から見た留学生のニーズとは何か

留学生に聴き取り調査を行った同日、県立大学教官に対しても聴き取り調査を行った。留学生の日本語補講担当の外国人教官と専門教育の教官から、それぞれ以下の点が挙げられた。

(a) 計画的な積み上げ式日本語学習

留学生によって日本語レベルに差があり、そのレベルに応じた日本語教育が必要であるとした上で、特に、初級レベルの留学生に対する日本語教育専門家からの、長期的な視野に立った継続的な教育の必要性があると指摘された。学部の講義への対応で精一杯の留学生の現状では、日本語そのものの学習がおろそかになりがちであるという懸念から、基礎的な日本語の復習から始まり、段階を追って順に積み上げる形での、計画的な日本語学習時間を確保するシステム作りが必要であるとの声もあった。それは、留学経験を持つ同国人の教官からの、いわば先輩からの要望であった。また、特に韓国人留学生に関して語彙学習の観点から、漢字指導の必要性も併せて指摘された。

(b) 日本語による社会科学系分野の知識

専門教育担当の教官からは、社会科学の幅広い分野を学ぶ上で必要な、日本社会の成り立ちに関する基礎知識の不足が指摘された。平成12年度留学生の日本語補講テキストとして、日本の高校で使用されている社会科の教科書を使用したとの報告を受けた。日本の地理、歴史、憲法、政治制度などの概要のような、日本人学生なら大学入学以前の学校教育で身に付けている、社会科学系分野のいわゆる「基礎専門科目」の知識を早急に獲得する必要があると考えられた。

単に専門分野の「知識」の不足という点だけ考えれば、母語による知識の補充が最も短期間に行えるという考えもある。しかし、その「知識」を「日本語で」学習することによ

学生には、松江研修であらかじめ苦勞をすることによって入学時のショックを軽減し、ソフトランディングを図りたいと考えた。

S.D.クラッシュの情意フィルター仮説²¹⁾によると動機の高さは言語の習得に有利に働くはずである。4月に正規入学を控えているという環境は、動機においてこれ以上ない絶好の環境である。この環境を最大限に利用したコースデザインができると考えた。そのためには、目標を高く掲げ、松江研修期間中に多少の消化不良は覚悟の上で上級レベルの日本語にチャレンジさせ、学習動機を高めることが必要であると判断した。

前節の留学生へのニーズ調査で明らかになった「(b)漢字学習」を実施するために、母語学習者別の個別指導が求められると考えられた。本研修は多人数クラスの授業ではなく4名の研修なので、個人差が顕著に現われると予想された。このため漢字学習以外にも個人的な学習の要望やレベル別対応の時間が必要と考えられた。

個別学習の時間をとれば、松江研修中のみでなく、今後の日本語学習計画についても個人的に指導することができる。それは、教官のニーズに挙げられていた「(a)計画的な積み上げ式日本語学習」の基礎となると考えられる。また入学後は、計画的な学習を継続することによって、「(d)日本語能力試験1級」認定基準に達するはずである。「日本語能力試験1級」は平成12年度留学生の日本語学習の目標でもあるように、松江研修を受ける留学生にとっても目標となると考えられる。

図1のアカデミック・ジャパニーズ概念図のうち、日本留学試験で測ろうとしている能力の範囲(網かけ部分)は、日本国外でも学習が比較的容易であるという予測によって定められていると考えられる。逆に、渡日前は学習しにくいということでこの範囲から外れている「社会知識」については、むしろ松江研修では扱いやすいと言えよう。特に「(2)社会関係」は、積極的に学習の機会を求めることが可能であると考えられた。また、図1の概念図の網かけ部分に一部相当している「生活スキル」のうち「(2)社会適応能力」は、文化接触の経験を通してより促進されると考えられるので、松江研修の中でテーマとして意識的にとりあげることがより有効であると判断した。

留学生のニーズである「(c)専門日本語」と専門教育の教官のニーズである「(b)日本語による社会科学系分野の知識」は、図1の「専門知識」に相当する。日本留学試験のシラバスではあまり重い扱いになっていない。つまり、留学生に来日後の学習を期待していると考えられるが、県立大学には大学入学後に正規の日本語教育プログラムがないので、松江研修で扱う意味があると考えられた。松江研修で取り扱う「専門日本語」の学習内容の候補として具体的には以下の二つが考えられた。

- ① 日本の高校卒業程度の専門分野に関する内容、いわゆる「基礎専門科目」を日本語で扱う
- ② 大学レベルの内容を先取りして扱う

①に関しては、授業のテーマに組み入れることで対応できそうである。しかし、②に関しては、日本語教育担当教官にとっては専門外の分野である。県立大学の専門分野の教官との連携が是非とも必要であると考えられた。また実際には、短期間の研修で扱うには限度があるので、松江研修では十分な実施は難しいと思われた。

「(c)専門日本語」の範囲には、専門の内容もさることながら、専門的な講義を聞くのに必要な日本語の表現に慣れるという学習項目も挙げられる。講義に使われる日本語の表

現を学習したり、専門的な内容の講義をまとまった時間、ノートを取りながら聞く練習をするためならば、日本語教育担当教官にとっての専門分野を講義するという方法をとることができる。すなわち、「日本語学習法」「レポートの書き方」などの留学生に有用な情報を扱う講義をすることによって「学習スキル」そのものを身につけるとともに、「学習スキルの身につけ方」という専門的な内容の講義を聞く訓練が実施できると考えられた。

留学生それぞれのレディネスの差が、留学生間のインフォメーションギャップを形成している。その点に着目して教官側が環境作りを心がければ、留学生間での相互補完学習が可能であると考えられた。留学生は、同級生としてこれから4年を共に過ごす仲間なので、人間関係にも十分な配慮が必要と考えられた。

(4)最終到達目標の設定とその教授計画の方針

留学生一人一人の人生にとって留学体験は特別意味のある経験となるだろう。4年間をいかに過ごすか、またその大学生活開始前に与えられた松江研修をいかに過ごすかは、非常に重要である。その見地から、松江研修の最終到達目標を以下のように定めた。

すなわち、「研修修了時に、県立大学入学に期待をもたせること。留学生自身が自らの日本語能力と学習方法を知り、自律学習を継続的に続ければ、必ず有意義な留学生生活になる、という展望と自信を持たせること」である。

研修内容は、県立大学総合政策学部入学後の日常生活及び勉学活動を円滑に行う上で必要な日本語能力及び学習スキル、周辺知識である。留学生によって日本語能力に差があるため、敢えて、研修による日本語能力向上後の全体に共通な到達レベルは設定しなかったが、なるべく中級終了レベルまでの日本語指導を目指すこととした。

1)内容中心日本語教育 —専門日本語への「橋渡し教育」として—

研修方法として、一般の言語教育としての日本語から「専門日本語」への「橋渡し教育」を意識し、取り入れた教授計画を設定した²²⁾。

横田淳子(1993)は、「一般日本語」から「専門日本語」へ、「言語習得」から「内容獲得」への移行を「橋渡し教育」と定義し、その教授法として「内容中心日本語教育」と称した三つのモデルを指摘している。それらは、「テーマ中心言語教育」、「保護内容教育」、「アジャнкт言語教育」である。松江研修は、この三つのモデルを取り入れた研修にした。

①松江研修における「テーマ中心言語教育」

大学入学前を直前にした留学生の興味とニーズに合ったテーマを選んで、テーマの内容自体に意味があるコースを設定した。内容の獲得に重きが置かれるので、「聞く、話す、読む、書く」という4技能を使った活動は、その情報の獲得と伝達のために訓練される。本研修における授業時間名では、主に「テキスト」に相当する。

②松江研修における「保護内容教育」

専門の内容を日本語で教育する。県立大学の学生の中から留学生だけを取り出して(保護して)教育するので、簡単な日本語に言い換えたり、プリントを配ったり、という配慮がなされる。留学生に日本語を使って専門の内容を獲得する経験をさせる。

③松江研修における「アジャнкт言語教育」

専門内容の講義を行う教官と日本語教育担当教官が連携をとって行う。専門の講義

に対応する日本語のコースを設定するものである。

以上のように、県立大学留学生のニーズに合致した内容の教育と、日本語の教育とを同時に扱うことにした。内容獲得のためのタスクを設定し、そのタスクを解決していく過程で学習スキルを学ばせ、併せて日本語の4技能の訓練も行うことにした。

3. 松江研修の実際

(1) 留 学 生

韓国人留学生2名、中国人留学生2名（レディネス分析の表1参照）

(2) 日本語教育担当教官

日本語教育専門教官：

松田みゆき（松江研修コースディレクター）

藤本順子（日本語ボランティアグループ「だんだん」所属）

宮川澄子（日本語ボランティアグループ「だんだん」所属）

高木裕子（日本語ボランティアグループ「だんだん」所属）

藤井昌美（日本語ボランティアグループ「いろは」及び「かけはし」所属）

特別講義担当教官：

別枝行夫（島根県立大学総合政策学部教授）

(3) 研修場所

しまね国際研修館（松江市東津田町369番地1）

(4) 研修期間

平成13年1月10日～3月27日

(5) 研修時間とスケジュール

1コマ目 9時～10時25分

2コマ目 10時35分～12時

3コマ目 13時～14時25分

4コマ目 14時35分～16時

（1コマ85分授業。月曜日午前のみ変則時間割）

表3 平成13年度島根県立大学交流県留学生
松江日本語研修スケジュール1週間標準モデル

曜日	清掃 8:30~ 9:00	午前(1コマ、2コマ) 9:00~12:00			昼休み 12:00~ 13:00	午後(3コマ、4コマ) 13:00~16:00
月		語彙復習 テスト	語彙	会話		個別指導
火		語彙	作文			テキスト
水		A J				個別指導
木		テキスト				語彙 会話
金		テキスト				聴解・ビデオ
土		休 講				
日		休 講				

(6) 授業内容

研修館での生活そのものがすべて学習となるように配慮しながら、基本的に表3のスケジュールに従って授業は行われた。

まず、「テーマ中心言語教育」の教授法で授業を行うことを考えて、一連の流れを持った三つのテーマを「テキスト」として用意した。

「会話」、「作文」は、このテーマとの関連を考えながらも独立させ、音声と文字による自己表現の訓練をする場と位置付けた。「会話」、「作文」は、ともに場面シラバスや機能シラバスを取り入れた授業を行った。「会話」では、実際に大学生活で使われる表現や語彙、いわゆる「キャンパス・ジャパニーズ」を学習しながら、自分のことが話せるように指導した。例えば、「大学の廊下で友人にコンパに誘われるが、レポートの宿題がたくさんあるので断る」などの場面を想定し、「誘い」、「断り」の機能を練習した。

「作文」は、自分のことについて書くとともに、レポートなどの論理的な文を組み立てる際の練習として、「意見文」、「比較表現」、「例示表現」などの表現を機能毎に練習した。

「語彙」は、日本語の言語知識を増やすために、機能語のテキスト1冊の全内容を扱った。

「A J」とあるのは「アカデミック・ジャパニーズ」を意識してつけた授業名である。日本語に関する専門の内容や社会科学に関する基礎的な内容の講義を行い、最後にはレポートも提出させるという、大学の勉学活動を一通り疑似体験させることを目的とした。

次に、これらの授業の内容を個別に詳述する。()内は総時間数を表わしている。

【テキスト】(84時間)

「テキスト」とは、「松江研修テキスト」というテーマ毎に分けられた教材を、配置したファイルに沿って行われた授業のことである。「テキスト」の時間では、「聞く、話す、読む、書く」の4技能をバランスよく訓練しながら、大学の講義と勉学活動を想定した学習スキルの獲得と、知識の獲得を総合的に目指した。松江研修におけるメインのテーマ学習として三つの「テーマ」を用意した。以下に一連の具体的な学習活動の流れをテーマ毎に示す。

テーマ1：新聞

目標：マスコミから日本語で必要な情報を選別収集できるようになること。

学習活動：新聞の読み方を知る。ニュースの聴き取り練習をする。インタビューをして記事を作る。5W1Hの整った事実文を書く。記事を書き、留学生新聞を発行する。

テーマ2：大学生のライフスタイル

目標：「早く日本人の友だちをつくりたい、浜田に行くのが楽しみである半面怖い」という留学生の現状によるニーズから、日本の大学生について知り、話す練習をすることを目標とした。

学習活動：留学生から島根大学に行ってみたいという要望があった。これに対して、島根大学生物資源科学部の藤本正昭教授と山本達之助教授が、研究室訪問を快諾してくださった。研究室訪問と同日に島根大学学生食堂他にてフィールドワークをすることに決定した。

研究室訪問：訪問前に、研究室訪問時の挨拶、簡単な自己紹介、先生への質問、退室時の挨拶などを練習する。訪問後、手紙の書き方を学び、訪問先に御礼状を書く。

フィールドワーク：テキストの「今どきの大学生」をはじめ、大学生に関する読解教材、新聞記事などを読む。日本人の大学生に聞いてみたいことを考え、調査テーマをみつける。調査事項を考え、アンケート用紙を作成する。同じ調査事項のインタビュー練習を行う。アンケート、インタビューの依頼のための会話練習をする。フィールドワークをする。結果を集計する。レポートを書く。発表する。ビデオに収録し、それを見ながら反省会をする。

テーマ3：異文化間コミュニケーション

目標：文化接触とは何かを客観的にとらえる一方で、自分のこととして具体的に考える。

松江研修修了式と同日に行う学習発表会で、文化に関するテーマでスピーチをする。

学習活動：テキストから「ステレオタイプについて」を読む。文化接触や文化変容の例を挙げ分析する。スピーチ原稿を書く。スピーチを発表する。

【A J】(28.5時間)

講義を聞くための技術、レポート作成の手順、日本語学習法などの「学習スキル」について具体例を提示し講義をした。これは、日本語教育担当教官が、教官自身の専門分野の内容伝達を行う講義である。講義の内容を理解することを目標として、日本語は内容理解に必要な程度を補うに留めた。これは、「保護内容教育」に相当する。また、実際に講義内容で扱ったスキルを駆使して、レポート作成を行った。この活動は「テーマ中心言語教育」の一環でもある。

また、別枝教授の特別講義に対応して、そのノートの取り方やキーワードの聞き取り、議論の追い方などについて練習したり解説を加えたりした。その際、別枝教授の講義ビデ

オを一部利用した。横田(1993)の「アジャンクト言語教育」モデルでは、専門教育は、「保護」されることなく日本人学生と同じ教室で受けることを想定している。今回は、別枝教授の「保護内容教育」にアジャンクトした形ではあるが、基本的には「アジャンクト言語教育」モデルと考えられる。

具体的目標等は以下のように設定した。

目標：情報収集の方法を学び、レポートを書く。

学習活動：担当教官のレポートの組み立て方に関する講義を聞く。テーマの選び方、発想法、情報収集の仕方、情報整理の方法、などの情報をノートにとる。

図書館関連：松江の地図で研修館、松江市立図書館などの場所を確認する。タウンページで図書館の電話番号を調べる。図書館に電話をかけて開館時間、借りるための条件などを聞く。図書館で貸し出しカードを作る。図書を選ぶ。図書を借りる。

参考図書関連：参考図書の種類を知る。辞書の引き方を学ぶ。

コンピュータ関連：コンピュータの操作方法を学ぶ。ワープロソフトの使い方を学ぶ。キーボードの日本語入力を練習する。キーワード検索などインターネットで情報を得る方法を知る。レポートを書く。

【特別講義】(12時間)

以下のような特別講義を実施した。

①「日米関係論」(別枝教授、1月18日実施)

目標：松江研修の初期に県立大学の専門の講義を体験させ、ショックを与えるとともに学習動機が高まることを期待した。

学習活動：50分の講義の後に質疑応答時間をとった。講義はビデオに収め「AJ」の時間で一部を日本語教材として取り扱った。ノートのとり方も「AJ」の時間で指導した。

②「地球温暖化」(別枝教授、3月19日実施)

目標：松江研修修了直前に前回と同じ教官の講義を聞き、留学生一人一人が日本語能力の向上を確信し自信を持つこと。

学習活動：予習のためのキーワードプリントを前日配布。予習の上で講義を聞く。講義の内容はビデオによって、より分かりやすく伝えられた。講義終了後、ディスカッションを行った。

③「松江探訪」(3月15日実施)

目標：留学生が「交流県留学制度」により来県していることを考えると、県庁所在地松江についての知識を得ることは重要である。出雲地方の魅力を松江出身の担当教官から聞くとともに、各地にその土地ならではの魅力があることに気づかせる。更に県立大学入学後は浜田市民との積極的交流を通して自ら石見文化を楽しむように期待する。

学習活動：松江探訪の前に観光案内、地図を読む。松江城、不昧公、小泉八雲についての知識を読解教材で学ぶ。茶道について学ぶ。実際にお茶をたてて飲んでみ

る。堀川遊覧船に乗り見学する。

【語彙】 (53 時間)

目標：『どんな時どう使う日本語表現文型 500』を 1 冊すべて学習する。ここに収められている機能語は日本語能力試験 1 級の出題範囲を網羅している。そのため、このテキストを 1 冊学習すれば、上級レベルの機能語を一通り勉強したという達成感を得ることができるとともに、おのずと学習の不十分な点が明らかになる。また、このテキストには索引がついているため、辞書的な使用法が可能である。このテキストを学生ひとりひとりが自分の今後の学習計画を立てるためのスケールとすることも可能である。

学習活動：このテキストの例文を音読した録音テープがなかったので、筆者が録音テープを作成し、あらかじめ渡した。授業時間前に予習をさせ、授業中は補足解説と復習プリントでの練習をした。毎週月曜日に復習テストを実施する他、2 回の総復習テストを行った。

【作文】 (11.5 時間)

目標：日本語の機能別表現を取り上げ、文法を意識しながら、客観的事実を述べたり、自己表現したりできるようになる。

【会話】 (19.5 時間)

目標：日本語を聞いたり話したりすることに慣れ、必要な情報を得たり自己表現をしたりできるようになる。

学習活動：実生活で日本語で困ったこと、分からなかったことなどを優先して取り上げ、話させる。また、その時どう言ったらよかったのか、ロールプレイなどで考えるとともに基本的な会話文を練習する。入学間近になってからは、「キャンパス・ジャパニーズ」など、すぐに必要になる位相語も取り上げた。

【聴解・ビデオ】 (21 時間)

視聴覚教材の特長を生かして、松江と浜田での生活だけでは実際に見ることのできない日本の風俗習慣、ライフスタイルなどの知識を得る。

担当教官の解説による手助けによって、娯楽作品である映画を「日本語で楽しむ」経験をする。

【個別指導】 (54 時間)

学生 A, B：初級文法事項の復習及び漢字学習。

学生 C：初級文法事項の復習。中級文法事項についての文法解説を母語で読み、復習しながら中級読解教材を読む。

学生 D：上級～超上級レベルの読解教材を読んで日本社会についての知識を深める。

【課外活動】

交換日記を書く。文やイラストを自由に書くことによって、日本語で自己表現すること

に慣れる。教官側としては、留学生の日常の様子を知ることによって、日本語学習のニーズをなるべく的確に早く知り、学習内容の微調整に役立てることができる。これは、持ち回りで、学生が書いた。教官も一人1回ずつ書いた。

学生Aと学生Dの誕生日には、「誕生会」をした。

「節分」と「雛祭り」の行事を体験した。

これ以外に、「インタビュー」(4.5時間)、「日本事情」(2時間)、「学習発表会」(1時間)などを必要に応じて行った。テストに要した12時間を含め、総授業時間数は、303時間であった。

以上の授業を、横田(1993)の橋渡し教育としての「内容中心日本語教育」の三つのモデル分類に当てはめると、以下のようなになるであろう。

①「テーマ中心言語教育(theme-based language instruction)」:

「テキスト」、「A J」のレポートを書く活動

②「保護内容教育(sheltered content instruction)」:

「A J」における専門内容教育、「特別講義(別枝教授担当)」

③「アジャнкт言語教育(adjunct language instruction)」:

「特別講義(別枝教授担当)」と「A J(別枝教授特別講義対応分)」の連携

横田(1990)は、「日本語による専門分野の教育(イマーション)にアジャнкт・クラスを設ける形態」を理想と言っている。松江研修での別枝教授担当「特別講義」と、それに連携した「A J」が、これに相当する。

(7)使用教材

『どんな時どう使う日本語表現文型500』と『中・上級者のための速読の日本語』、及び「島根県立大学交流県留学生松江日本語研修テキスト(松江研修テキスト)」は、全員に配布した。いずれの授業も必要に応じてプリントを作成して使用した。その他、テレビのニュース、新聞記事、雑誌の切り抜きなどのいわゆる生教材を適宜使用した。

また、国際研修館の図書室内にある図書を「個別指導」時間などに利用した。それは、主に初級レベルの復習用練習問題、地図・図表・辞書などの参考図書であった。

松江研修で使用した教材は下記のとおりである。

【語彙】

『どんな時どう使う日本語表現文型500』友松悦子、宮本淳、和栗雅子著、1996年、アルク

【テキスト】

「松江研修テキスト」にファイルした教材:

『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』鎌田修、梶本総子他著、1998年、ジャ

パンタイムズ／『文化中級日本語Ⅱ』文化外国語専門学校編、1992年、文化外国語専門学校／『インタビューで学ぶ日本語』堀歌子、三井豊子他著、1991年、凡人社／『実践力のつく日本語学習アンケート編』谷口聡人、堀歌子他著、1993年、アルク

その他に使用した教材：

『テーマ別中級から学ぶ日本語』荒井礼子、太田純子他著、1991年、研究社出版／『中・上級者のための速読の日本語』三浦昭監修 岡まゆみ著、1998年、ジャパンタイムズ／『タスクによる楽しい日本語の読み』山田あき子著、1990年、専門教育出版

【A J】

『講義を聞く技術』産能短期大学日本語教育研究室編、1988年、産能大学出版部／『大学生のための日本語』産能短期大学日本語教育研究室編、1990年、産能大学出版部／『留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子、佐藤不二子著、2000年、スリーエーネットワーク

【作文】

『表現テーマ別にほんご作文の方法』佐藤政光、田中幸子他著、1994年、第三書房

【個別指導教材】

学生A,B：『INTERMEDIATE KANJI BOOK Vol.1』加納千恵子、清水百合他著、1993年、凡人社

学生C：『標準日本語中級上』人民教育出版社、光村図書出版株式会社編、1990年、人民教育出版社／『標準日本語中級下』人民教育出版社、光村図書出版株式会社編、1990年、人民教育出版社／『テーマ別中級から学ぶ日本語』荒井礼子、太田純子他著、1991年、研究社出版

学生D：『過渡期の「日本」を考える』三牧陽子、村岡貴子他著 1997年、凡人社

【会話】

『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』山内博之著、2000年、アルク／『留学生のためのキャンパス・ジャパニーズ』飯野清士、中渡瀬誠他著、1992年、専門教育出版／『ニュースからおぼえるカタカナ語 350』堺典子、西平薫著、1998年、アルク／『音とイメージでたのしくおぼえる擬声語・擬態語(初・中級)』山本弘子著、1993年、専門教育出版／『ビデオ講座日本語日常生活に見る日本の文化5巻』氏家研一企画構成、1994年、東京書籍

【特別講義】

「地球温暖化—予習のためのキーワードプリント—」別枝行夫／「松江を知る—松江城と不昧公—」宮川澄子、2001年、松江研修オリジナル教材／「『耳なし芳一』を読もう」松田みゆき、2001年、松江研修オリジナル教材

の選択肢のうち一体どれが答か全く想像もつかなかったが、最終テスト時には結果的には正答が得られなくても正答を含む選択肢で迷うことができた」と言っていた。このことから、日本語の集中研修を行うことによって、おぼろげながらも日本語の知識が身につくという感触を留学生が得たということが分かるとともに、日本語能力試験1級が、学生A,B,Cの日本語能力を測るテストとしては必ずしもふさわしくなかったことが分かる。

一方、達成度を測るアチーブメントテストである「中間テスト」、「語彙復習テスト」には、留学生の努力の跡が顕著に現われた(表6と表7)。ほとんど一日中日本語漬けになって勉強していたことが、これらの達成度を測るテストの結果となって現われたと評価される。

(2) テスト以外の評価

数値として測ることができなかったが、テスト以外にも次のような評価が得られた。

平成13年2月23日に県立大学を訪問した留学生たちは、教官会議に呼ばれ、そこで日本語による挨拶をした。その折の印象から彼らの日本語能力が大きく向上したことを多くの県立大学関係者が評価した²⁵⁾。

松江研修の初期に行った「特別講義(1月18日)」の際、講義後の質疑応答時間で質問したのは、学生Bのみだった。それに対し、松江研修終了直前に行われた「特別講義(3月19日)」では、講義終了後、テーマに関してディスカッションを行い、すべての留学生がそれぞれの意見を言えるようになった。

日本語研修を受けるために共同生活をして、同国人同士の場合は教室外の共通語が母語になることが多い。これに対して、母語の異なる留学生とのコミュニケーションは、日本語で行わなければならないために、努力が必要となる。松江研修では、県立大学入学という同じ目標を持つ2か国の留学生が、一緒に合宿することによって、自然に留学生同士で関心を持ち合うことができた。また、多様なインフォメーションギャップも存在していたため、日本語によるコミュニケーションが自然に生まれた。

例えば、健康管理とも関係が深い食事は、コミュニケーションを生む重要なファクターであった。全く料理の経験がなく、この研修期間中に生まれて初めて目玉焼きを作ったという留学生もいたが、料理のよくできる留学生が2名いたので、ここでコミュニケーションが生まれた。それぞれの国のおかずを一品ずつ作っては、それをテーブルの真ん中に置き、各自の茶碗を手に仲良く食事をするのが日常となった。本研修において、自分の食事を自分でまかなう訓練も併せて行う結果となった。これは、県立大学の国際交流会館での共同生活の準備になったのではないだろうか。目玉焼きを初めて作ったという前述の留学生は、本研修中に料理の基礎を学びレパートリーを増やして、入学後日本人学生に披露しているとのことである。入学後の勉学面での負担を考えると、生活面では研修館での生活によって、多少なりとも自炊に慣れておくことができたのは、日本語研修を行った副産物であった。食事は、研修期間中を通して、留学生の最大の関心事であった。交換日記の内容は勉強のことで食べ物の方がほとんどであった。

学習面では、中国人留学生が韓国人留学生に漢字を教え、その一方で韓国人学生が図書

館で中国人留学生を手伝った。中国人留学生は、多くの本の中から必要な本を探した経験やコンピュータを使った経験がなかったそうである。また、単語の意味を知っている留学生が、意味を知らない留学生に日本語で説明したり例文を作って示す、各国事情を話すなどという形で学習が進んだ。日常の学習そのものが4人の共同生活における協力関係をつくり、学習面でもよい効果を挙げたと考えられる。交換日記を書くことも楽しい共同作業のひとつであったようだ。

研修初日の開講式で筆者は、「松江研修では、研修開始時の自分の日本語が修了時にどのくらい磨けたかを問題にする。隣の友人の日本語と比較してもまったく意味がない。それは、日本語は県立大学に入学して専門分野の勉強活動するためのひとりひとり個人の道具であるからだ。日本語能力の差は、それぞれが持っている道具の差であって、それは、今までの学習時間の違いによるものであり、勉強時間の短い人ができないのは、当たり前である。恥ずかしいと思う必要はない。」と、コースディレクターの立場から留学生らに伝えた²⁶⁾。これは、日本語能力に差がある留学生が互いに無意味に競い合うことを未然に防止し、自己の研鑽に専念させる効果を期待して行った挨拶であったが、確かに効果的であったと考えている。留学生にとって松江研修は、お互いの人間性を知り、励まし合いながら、自分の日本語を磨くことに専念できた研修だったと想像される。

次に彼らの研修に対する評価を述べる。

(3) 留学生による評価

松江研修を修了するにあたり、以下のような最終インタビューとアンケートを実施した。以下にその結果を報告する。

1) インタビュー

留学生への最終インタビューでは、松江研修は次のような評価を受けた。

- ・簡単な語彙と文型を使って、日常生活では、あまり困難を感じずに思っていることを伝えることができるようになった。(学生B,C)
- ・1級認定レベルに必要な語彙の勉強を一通りしたという満足感が得られた。1冊まるまる本を終えたことは自信につながる。あとは、十分に覚え練習するだけである。(学生A,B)
- ・親切的な日本人に会って楽しかった。(学生全員)
- ・全然できなかった料理ができるようになり、入学後の自信がついた。(学生D)

2) アンケート

松江研修修了時に実施したアンケートの項目は以下のとおりである。

松江研修に関する次の項目について感想を書いてください。

- ① 研修館での生活 (施設 生活規則 事務局)
- ② カリキュラム (授業のレベル 授業の進度 宿題)
- ③ 講師 ④ クラスメート ⑤ その他
- ⑥ もっと日本語を上手に使えるようにするためには、どのようなことが必要だと思いますか。「自分のすべきこと」「県立大学や周りの人に望むこと」の2つに分けて書いてください。
- ⑦ 後輩(来年度入学予定の留学生)にこの研修をすすめますか。それは、どうしてですか。

これに対して以下のような結果が得られた。

- ① 研修館での生活：全員がよい評価だった。
- ② カリキュラム：
授業のレベル：始めは難しいと思いましたが、今は良かったと思っています。
(学生A)
難しい時も易しい時もある。(学生D)
授業の進度：ちょうどいい。(学生A,B,D)
ちょっと速いと思うが、内容はいい。(学生C)
宿題：ちょうどいい。(学生A)
多いけれど必要。(学生B)
ちょっと多く、復習の時間が少ない。(学生C)
少ないときも多いときもある。(学生D)
- ③ 講師：全員から「親切で授業も分かりやすかった」という良い評価を得た。
- ④ クラスメート：全員が「仲が良かった。他の3人のおかげで研修は楽しかった」というプラス評価であった。
- ⑤ その他：先生たちと話す機会が少ししかなかったと思います。(学生C)
- ⑥ 自分のすべきこと：日本語の文法を勉強する。(学生A)
一生懸命勉強すること。日本語ばかりでなく日本について知っているべきだということが分かりました。そうしたら、日本語がもっと上手になると思う。(学生C)
興味をもって積極的に楽しく勉強すること。(学生D)
県立大学や周りの人に望むこと：松江研修で先輩ともっと早く会って、たくさん話し合う時間がほしかった。(学生D)

日本人の学生と友だちになっていい関係を築きたい。(学生C)

⑦ 後輩にすすめるか：すすめる。(全員)

その理由：留学生に必要で、大学で役に立つことが勉強できるので。(学生A)

日本について勉強してから大学に入る方がいいから。(学生B)
聴解の能力が伸びるから。もし研修時間がもうちょっと長くなれば聴解が良くなるだけでなく、私の会話も上手になったと思います。(学生C)

言葉の勉強は環境が大切なので、入学前に日本で勉強することは必要だから。(学生D)

(4) 日本語教育担当教官による評価

本研修は、大学入学後に勉強活動で不自由がないようにしようとして設定されたために、初級後半レベルの日本語能力で来日した留学生にとっては学習事項が多く、その負荷は大きなものになった。その負荷をかけることを使命とされた教官の中には、多大な負荷を留学生にかけることに対して研修開始当初躊躇を示す教官もいた。

日本語教育の教官は通常、クラッシュエンの「i + 1」のインプット仮説²⁷⁾を意識して授業を進める。つまり、学習者が必要とするインプットは、学習者の現在の言語能力「i」を含むインプットであり、新しい学習事項「1」の量が適当かどうか常にチェックしながら授業を進める。その授業の進め方に慣れた筆者を含めた教官らにとって、今回の研修の「橋渡し教育」の「橋」は、大変な急勾配で苦しいと感じることも多かった。研修期間に対して「1」の数が多すぎると感じたのである。

それにもかかわらず、今回の研修では、ほぼ当初の予定通りの教授計画が実施でき、一定の成果を収めることができた。それは、日本語の言語教育のみに意識を奪われることなく、常に、なぜこの研修が必要なのかという理由を教官間で明確にし、また、その意図を留学生にも伝えつつコースを進めたためではないかと思われる。また、「内容中心日本語教育」のモデルを意識し、日本語で獲得できる「内容」に関心を寄せた一連の活動をしたために、留学生が内容に引き付けられ、日本語が不自由であることについて、必要以上のプレッシャーやストレスを感じなかったこともよかったのではないかと思われる。

幸いなことに、留学生は心身ともにすこぶる健康で、研修実施の時期が冬季であったにもかかわらず、風邪一つひかなかった。全員が皆勤賞であった。

松江研修の最終到達目標である「研修修了時に、県立大学入学に期待を持たせること。留学生自身が自らの日本語能力と学習方法を知り、自律学習を継続的に続ければ、必ず有意義な留学生生活になる、という展望と自信を持たせること」は、おおむね達成したと評価できた。

おわりに —今後の課題—

県立大学の留学生は、総合政策学部の学生として学び、研究するという目的を持って日本に留学してきている。その研究を行うための道具として日本語は不可欠である。一般の

留学生には日本語教育が正規のカリキュラムとして用意されている大学も多く、そのような大学では日本語が外国語科目の単位相当として扱われている。県立大学には日本語の補講はあるものの正規の日本語科目がないこと、また、実際に来日した留学生の日本語能力が、すぐに大学の講義を受けられるレベルに達していなかったことを考えると、本研修のような入学前教育は、留学生にとって非常に有意義であると考えられる。仮に、日本語の言語能力が上級レベルの学生であったとしても、日本人学生が日本の学校教育で学んできて常識的に前提としている基礎専門科目の事項に関しては補う必要がある。また、異なった社会での生活に必要な生活習慣や文化に関する知識をレクチャーする日本事情の授業や、それを分析し調整するための能力を養うためのカウンセリング的な時間も必要であろう。したがって、今後も、この松江研修あるいはこれに相当する留学生の日本語教育のサポートを、入学前・後において計画的に行うことが望ましい。

その一方で、日本入国前に母国でできる限りの日本語学習などの、日本留学に対する最低限必要な準備すら満足に行われていない現状も問題なのではないだろうか。これに対する入学許可内定後の母国での日本語学習をより促進させるための現実的な提案として、例えば、入学許可内定の後に、日本語能力試験1級試験の受験を義務付け、そしてその結果の提出を求めるといった方法はどうか。入学内定の時期は夏であり、日本語能力試験は12月に実施される。その後、来日するという時間的な条件も都合がよい。国外での日本語準備の目標をより明確にすることが可能になると期待される。

また、以下で述べるように、県立大学の留学予定者が大学入学前に備えているべき最低限の日本語レベルを一概に設定することはできないと筆者は考えている。

県立大学が実践的英語教育に力を入れている現状から、留学生は大学入学後、日本語に加え英語学習にも多くの時間をかけることとなる。日本語も英語もどちらも専門分野に関わる勉学の道具であるということを見ると必要不可欠ではあるが、もし、それらの言語学習に学習のほとんどの力を注がなければならないとしたら、本末転倒になってしまうのではないだろうか。第一外国語として中等教育機関で日本語を数年にわたって学習し、英語をほとんど勉強していない留学生には、入学後の英語学習の負担を考慮して、入学決定時の日本語能力に高度なレベルを要求したらどうか。また反対に、大学入学後勉学活動に不自由しないと考えられるレベルの英語を身に付けていると判断された留学生に対しては、入学後の日本語教育のサポート体制を整えた上で、入学に必要な日本語能力レベルを別に設定すればよいのではないか。言語学習と専門分野の勉学活動のバランスに配慮した留学生の決定とその後の指導が必要だと考えられる。

留学生を選考する際に考慮する点として、専門分野研究でのポテンシャルのある留学生を入学させるという方法も考えられる。来年から本格的に実施される日本留学試験では、英語のみの受験も可能とされる予定である。こうして、文部科学省は留学生の増加を目的として、渡日前に留学生の受け入れを大学が決定できるような新しい試験制度を導入しつつある。面接試験の際に日本語能力が低い留学生は、一見すると学習全般に関する能力が低く見られがちであるが、単に表現手段としての日本語という道具が使いこなせないだけということも多い。一方、論理的な文章を書かせたときに、日本語の間違いは少なくとも論理の組み立てや思考方法の訓練が不足していると思われる留学生もいる。日本語教育担当教官は、誰が読んでも間違いなく意味が伝わる日本語を留学生に指導する能力はあるが、

母語で論理的文が書けない留学生に論理的思考の基礎訓練も同時に行うことは困難である。単に、日本語ができれば大学での勉学活動ができるというわけではない。それは、昨今の日本で高学歴化が進み、大学への進学率が高まっている一方で、大学生の学力の低下が問題となっている現状を見ても明らかなことである。このことは留学生にとっても同じであろう。少なくとも母語による十分な思考訓練がなされ、社会科学分野の勉学と研究が母語でできる留学生でなければ、どんなに日本語を訓練しても、県立大学が北東アジア地域の将来を担う期待をかける人材を育成、輩出することは難しいのではないだろうか。もちろん、日本語能力を留学生決定の重要な要素とせず、専門分野の研究のポテンシャルで決定するのは、県立大学入学後に日本語の言語教育面での強力なサポート体制を県立大学で用意した上でのごとでなければならぬと考えられる。

以上のことから、県立大学がどのような留学生を期待するのか、選考時における留学生に求めるアカデミック・ジャパニーズの範囲について、今一度十分に話し合われるべきだと筆者は考えている。日本留学試験が日本語シラバスで網かけ範囲を設定したように、県立大学が入学時に求める能力は、図1におけるどの部分なのかについて、独自の網かけ範囲の設定を行う必要があるのではないだろうか。県立大学の求める留学生像を明確にし、何を優先順位として留学生の可否を決定するのか、そしてその際に、日本語能力の補完をいつ、どのように行うのか、などの十分な話し合いが必要だと思われる。その上で、改めて入学前・後の日本語サポート体制との連携を考えるべきであろう。今回の研修における「アジャクトプログラム」のような専門分野の教官との連携もますます必要となるだろう。また、日本語教育の効率化を図り、短期間で専門分野の講義に耐えられるだけの日本語能力を身に付けるためには、日本語教育の立場から県立大学で求められている日本語能力のデータを分析することも必要である。県立大学で実際に使用されている教科書や講義において使われる談話などの分析も必要となってくるだろう。

専門分野での勉学活動を短期間に円滑に行うためには、日本語を使って新たな専門の情報を得る学習活動に限らず、留学生の母語を使用して内容の獲得を先にするというアプローチも選択肢に入れねばならない。そうすると、ますます日本語と専門分野の教官、更に他の言語教育の教官との連携が必要になる。

最後に、留学生が将来、北東アジア地域で活躍することを考えた時、自国の母語教育が必要となる可能性があることを付け加えさせていただく。例えば、平成13年度入学の中国人留学生は高校卒業後すぐに来日した留学生である。母語で高等教育を受けた経験がないので、専門分野に関して母語で表現することに困難が伴うことが予想される。卒業後に、県立大学での研究成果を自国で語る際の母語の表現能力をサポートする体制も必要になるのではないだろうか²⁸⁾。

今回の松江研修で得たこれらの課題を今後の県立大学における留学生の日本語教育の方向性を考える機会としていただければ有り難い。

謝辞

藤本順子、宮川澄子、高木裕子、藤井昌美の各先生方は、本研修の意図に沿った適切な日本語教育をしてくださった。教務はもちろんのこと、留学生の生活面にも常に気を配り、サポートしてくださった。留学生が来日後初めて身近に接する日本人として、そのホスピ

タリティーは非常に好ましく、研修全般によい影響があった。

鳥根県立大学総合政策学部の別枝行夫教授は、本研修の意図をご理解いただき、その趣旨に沿った特別講義等をしてくださった。専門教育担当教官と日本語教育担当教官の今後の連携の可能性への期待を示唆するモデルケースを実践してくださった。

鳥根大学生物資源科学部の藤本正昭教授と山本達之助教授は、留学生を鳥根大学の研究室にお招きいただき貴重な経験をさせてくださった。

財団法人しまね国際センターの多くの職員の方々には、教室・教具の環境整備、留学生の日常生活などにおいて大変お世話になった。

ここに記して各位への感謝の気持ちを表わしたい。

注

- 1) 技術研修や留学などを目的として鳥根県に来訪する外国人に対して、県内在住期間中の日常生活を円滑に過ごすことができるようにするために、日本語研修及び生活指導を行うことを目的として設置された施設。(財)しまね国際センターが管理運営している。
- 2) この名称は(財)しまね国際センターが研修を行うにあたり、テキスト、修了証、県立大学への報告書などに使用した名称である。留学生及び日本語教育担当教官らは、通称として「松江研修」と短く呼んだ。(財)しまね国際センターによる講師辞令等の事務手続き上の名称は、「鳥根県立大学留学生に係る日本語研修」であった。県立大学では、「鳥根県立大学留学生の日本語研修」としている。本稿では、混乱を避けるため研修現場での呼称を使用した。
- 3) 鳥根県立大学「平成13年鳥根県立大学留学生の日本語研修要領」による。
- 4) 鳥根県民の国際交流活動を促進し、地域の国際化を進める機関として平成元年に設立された財団法人。
- 5) 鳥根県立大学「鳥根県立大学の交流県留学生制度(1)目的」による。
- 6) 日本の大学への進学目的で来日した学生に対して、入学前の日本語教育の指導、いわゆる「予備教育」が行われている。「予備教育」は、国立大学の留学生センターなど(37か所)や私立大学・短期大学附属の留学生別科など(53か所)で行われる他、「就学生」資格で来日した学習者に対し、民間の日本語教育機関(300余か所)で行われている。大学等の日本語教育機関数は、『我が国の留学生制度の概要』(2001)、民間の日本語学校については『月刊日本語』(2002)による。
- 7) 鳥根県立大学「鳥根県立大学の交流県留学生制度(2)資格」による。
- 8) 「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議(2000)11頁。
- 9) 県立大学に正規の日本語の授業がないため、平成12年度の留学生に対して日本語教育の補講などの措置がとられた。日本語補講は、「地域言語」の時間その他を充てて、留学生と同じ出身国の外国人教官と日本人教官によって行われた。
- 10) 「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議(2000)11頁。
- 11) 鄭美熙;鳥根県留学生等交流推進協議会『国際交流しまねNo.10』12頁。
- 12) 王思洋;鳥根県留学生等交流推進協議会『国際交流しまねNo.10』13頁。
- 13) 補講時間ということもあったので、調査というよりもビジターセッションのような雰囲気でのインタビューを試みた。入学直後に日本語で苦勞した点について大いに語ってくれたほか、留学生から筆者に日本語学習方法の質問が出るようなインタラクティブな座談会であった。
- 14) ここで言う「第二言語」とは、「外国語」として限られた場で使用する非母語ではなく、留学生を取り巻く環境の必然性からコミュニケーション手段として日常的に使用する非母語という意味である。
- 15) 「一般の社会生活において現代の国語を書き表す場合の目安を示す」とされる常用漢字表には、

- 1,945字が挙げられており、学生の漢字学習の目安となっている。志柿(1992)は、初級漢字300字と「経済学基本漢字」300字を挙げ、この600字で経済学の勉学活動ができるとしている。
- 16) 深澤(1994)は、理工系の学生を対象にした科学技術論文を指導する際に、「一見すると一般の言葉でありながら、科学技術文特有の正確さを期するために、より限定した意味で使われている語や表現」について「準専門用語」と規定し、その指導上の注意に言及している。小宮(1995)は、経済の基本的な専門語における日常語の重要性に言及している。
- 17) 岡益巳(1994)。
- 18) (財)日本国際教育協会、(財)国際交流基金『2001年度日本語能力試験実施要項』「試験の構成及び認定基準(別表)」による。
- 19) (財)日本国際教育協会留学情報センター(2001)21頁による。
試験の成績をどの程度重視して合否を決めているのかは大学によって違い、1級合格が大学入学の必須条件と言うわけではない。
- 20) 平成13年度文部科学省高等教育局留学課『我が国の留学生制度の概要』18頁。
- 21) S.D.クラッシュェン、T.D.テレル(1986)によれば、学習を妨げる心的障害「情意フィルター」が低ければ低いほど、第二言語習得が促進される。高い動機付けがあり、不安感がなく、自信のある学習者は情意フィルターが低いとされている。
- 22) 「橋渡し教育」を意識した『中・上級社会科学系読解教材テキストバンク』などの教材や加納(1990)の専門書を読むための読解指導、木戸(2001)のアカデミックライティング指導などの報告も参考にして教授計画を立てた。
- 23) 学生Cは、1級の聴解試験において解答欄の書き間違いのミスを犯したため極端に成績が悪い。成績不振がこのミスが原因であることは、2級の聴解の結果を学生A、Bと比較してみても明らかである。
- 24) (財)日本国際教育協会、(財)国際交流基金『2001年度日本語能力試験実施要項』「試験の構成及び認定基準(別表)」による。
- 25) 「県立大学NEWS第37号(メール版)文責:中島、2001年2月26日」には次のように書かれていた。タイトル:「第2期交流県留学生の日本語能力が急速に向上しています」内容:「しっかりとした挨拶で、来県当初、片言だった日本語能力が急速に向上しており、事前研修の効果は絶大なものがあることがわかりました」。
- 26) 開講式の際、筆者が松江研修の意図や教授方針などを話したが、その折に、(財)しまね国際センターの職員が通訳をした。
- 27) S.D.クラッシュェン、T.D.テレル(1986)。
- 28) 松江研修を受けた中国人留学生の日本語の補講を平成13年度前期に担当された島根県立大学総合政策学部陳仲奇助教授は、日本語から留学生の母語である中国語への翻訳の訓練を通して中国語の指導もされていた。また、後期の日本語の補講を担当された唐燕霞講師からは、留学生が「日本語の発想による中国語を時々話すようになっている」とのご指摘があった。これらの補講は留学生の母語保存をサポートする機能を果たしていると思われる。

参考文献

- (株)アルク「最新日本語学校事情」『月刊日本語』第15巻1号、2002年、24頁-31頁
- 岡 益巳「経済学部留学生のための経済用語の指導について」『日本語教育』82号、1994年、23頁-33頁
- 加納千恵子「専門書を読むための読解指導について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』第6号 1990年、35頁-64頁
- 木戸光子「日本語教育におけるアカデミックライティングの試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第16号、2001年、121頁-132頁
- S.D.クラッシュェン、T.D.テレル『ナチュラル・アプローチのすすめ』藤森和子訳 大修館書店 1986

年(原著:S.D.Krashen and T.D.Terrell, The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom, California, Alemany Press, 1983.)

小宮千鶴子「専門日本語教育の専門語—経済の基本的な専門語の特定をめざして—」『日本語教育』86号 1995年、81頁-92頁

志柿光浩「経済学専攻の非漢字圏学習者にはどんな漢字を教えればよいか—経済学文献を対象とした漢字使用頻度調査の結果と分析—」『日本語教育』76号 1992年、67頁-87頁

東京外国語大学留学生日本語教育センター『中・上級社会科学系読解教材テキストバンク』1998年(財)日本国際教育協会『Student Guide to Japan 2001』2001年

「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議『日本留学のための新たな試験について—渡日前入学許可の実現に向けて—』2000年

深澤のぞみ「科学技術論文作成を目指した作文指導—専門教員と日本語教師の視点の違いを中心に—」『日本語教育』84号、1994年、27頁-39頁

文部科学省高等教育局留学生課『我が国の留学生制度の概要』2001年

横田淳子「専門教育とのつながりを重視する上級日本語教育の方法」『日本語教育』71号、1990年、120頁-133頁

横田淳子「内容中心日本語教育—留学生の専門への橋渡し教育として—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』19号、1993年、43頁-59頁

キーワード: 島根県立大学交流県留学生 専門日本語 アカデミック・ジャパニーズ
橋渡し教育 内容中心日本語教育

(Miyuki MATSUDA)